学私のバリケード

―早大斗争の記録―

早大全学共闘会議

早大全共斗の唄

一　おいらの生れはここではないが
　おいらの魂はここに高鳴る
　頭の上には同じ空が
　そうじゃなく　また常に
　そうしゃ求めず
　おいらは戦うために来たのさ
　　全学共斗の行く所
　　ファシスト（＝暴マル）は滅ぶ滅ぶ
　全学共斗の行く所　ファシスト（＝民青）は
　　滅ぶ滅ぶ　進め！進め！

二　妻とおいとを家に残して
　世界の果てから集り来しは
　一歩も退却するためならず
　おいらの数は少なかけれど
　おいらは戦うために来たのさ
　　（以下同）

（〝オセ赤国のうた〟の節で）

〈目　次〉

Ⅰ　叛逆―われわれの生の始源
　―二・七集会前後―
Ⅱ　幻の唐獅子牡丹登場
　―卒業式粉砕斗争その後―
Ⅲ　四・一番外地集会
　―学館解放―
Ⅳ　四・一四二マロメ集会
　―流動する政治情況―
Ⅴ　本部封鎖から機動隊導入まで
　―ムドゴとのおこりしや明らかならず―
Ⅵ　四・二八再占拠
　―立入禁止を禁示する―

Ⅰ. 叛逆 ― われわれの生の始源

一七集会前後

ぼくたちぼくの言葉で語りたい

―社会反戦連合（準）―

1.

フランス、五月の壁は語る。

「空想力による革命を」……昨年五月のフランスの学生の闘い、東大、日大の闘い、と激動する情況は、我々の深部へ鋭くつきささる問いをくりかえしつづけける。情況を先取りすることが我々の〝希望〟である限り、現在は情況を先取りできない。おいかけることにのみ精力をつくさねばならない時であろう。

2.

情況は、我々に闘うことを強いる。しかし我々は自分に問いを発した。〈なぜ〉！〈なにを〉！問いを発することは、我々の闘争宣言である。

3.

我々の学部一年生の数人の集まりから我々の運動は出発した。〝日大闘争とはなんだ〟〝サンパってなんだ〟そうした問いを発しつゞける中から〈運動〉の意味、〈闘争〉の意味をおもいと問わねばならなかった。

4.

我々は個人から出発する。日常から出発する自己唯一者として自己の存在を闘いに課すとき、出発はここしかない。そこには いかなる党派の論理も組織の論理もない。我々は自己の内部の〝言葉〟で語るところから出発する。それは自己存在を求めてくりかえす闘いが、組織や綱領を超える時点が、そこにそあるだろうから。

5.

我々は、ここに闘う仲間が集まり、論争とはなく、自己がひきずっている矛盾を語りたいと思う。批判が、同意が、各々の言葉で語られる時、我々はアジテーションに死を与えることができると思う。そこに自己への指向と個人からの発想の根源的な闘いを生みだしてゆこう。

行動アピールⅠ

―社会一年クラス反戦―

もう！ われわれは耐えることはしない
生きている
われわれは耐えることはしない
生きているのだから
日大はわれわれの闘い
東大はわれわれの闘い

もう！ われわれは耐えることはしない
黙することが闘争の圧殺なのだから
「今」われわれは虐殺者とはかならない

現に生きている社会を告発するために……

……さ迷っている自己を告発せよ！

みずからのたたかいを組織せよ

みずからの中にベトナムを創造せよ！

われわれは耐えることはしない

ブルジョア社会がわれわれを死滅させる！

そしてヨルがさらにわれわれを団結させるであろう！

叛逆！

東大・日大斗争に連帯し
早稲田に叛逆のバリケードを！

——東大・日大斗争連帯行動委——

われわれは、早大全学反戦（準）早大社会科学部クラス反戦全学（準）の提起した二・七集会を支持する。われわれはこれに個人として参加するとともに、組織としてここに多くの学友が二・七に参加し、夏期闘争の討論を展開するよう訴える。

東大斗争はおわらない、日大斗争はおわらない、斗争が提起した問題はなにひとつ解決されていないのだから。大学革命ははじまったばかりなのだ。

安田講堂のバリケードが一方の官憲に破られようと、東大斗争はほろびない。ほろびたのは近代百年の歴史に連綿と続いた「和」の神話的思想風土であり、下半身をそこに無批判にひたしたまま頭の中でのみ「先進的」な理論をつくりつづけたすべての近代主義——日共、講座派、丸山眞男等々——の「二階建」文学であり、機動隊の暴力を実体としていた「戦後民主主義」の神話であった。

東大全共斗の学友たちは戦術的に誤っていたという者がある。たしかに彼らは政治的には敗北をこうむって斗争の一サイクルをおえた。しかしかれらはその非力——それは「われわれ」の責任だ！——と誠実さによって「政治」と「原理」が背反したときに「原理」をえらんだのだ。彼らが克服しようとしていたのは、政治と思想原理が、理論と実践が、合理性と「生きてあること」とが分裂した主体喪失に追放させられてきた日本近代の構造であり、物質的、精神的豊の最良の部分が労働人民の生活の外部にうみだされる現代文明の構造そのものだったのだから。

——城を捨にあえて討ち死にしようとした学友たちが欲しかったのは、理論と実践、合理性と実存を「叛逆」の基礎の上に統一することによってこうして歪んだ近代を「0°」にすることだった。いまこそ、行動がそれ自身原理であるような新しい激動の時代が来ようとしている。「反大学」を提起するに至った日大の、一・一八、一九をたたかった東大の、そして全国多くの学園の、現段階に至るたたかいはこの展望をきりひらいた。

われわれは紀元0年に立っている。

げんざいは家惟力、加藤東大斗局、日共の凶暴が弾圧により多くの学友が重傷負い、一〇〇にのぼる学友がこの寒いなかを獄にとらわれている。われわれはどうして、すぐさま決意をかため、あらゆる行動をもって彼らを支援させずにいられるだろうか。しかし「支援」はいかなる同情によるものでも許されてはいない。東大、日大斗争の真に巨大な歴史的意義は、まさしく彼ら斗う学友が日本の高級・中堅官僚候補生であることを自ら問題の中において自己変革を目ざすなかで、大学と社会を告発し、変革しようとしたことにある。彼らは自らを革命の主体であると同時に対象で

もあるとみなすことによって、権力に加担し日常性に安住する教授や学生全体にたいし、「おまえはなんなのだ」という問いをつきつけることができたのだ。

ブザマにも平和〃な早稲田にあって安閑としているわれわれほどに「おまえはなんなのだ」の叫びを必要としている者があろうか！ 全国いたるところ、バリケードの中から予備校の廊下できびしく真剣に学問と教育のありかたが問われ、社会のありかたがとわれているというのに、われわれのところでは学年末試験のことしか語られない。

「おまえはなんなのだ、単位をとり、卒業し、それからっ――それから奴隷を管理する奴隷として国家＝独占につかえるのか！」――暗い留置場の奥から、警察病院の隅から、バリケードのかなたから、われわれに見えもしない社会の底辺から、労働の現場から、わきおこって耳を圧する叫びをきかねばならぬ。「おまえは、おれたちにのしかかっているこの〝秩序〟を、〝繁栄〟を、〝平和〟をえらぶのか。命がけで自由を求める俺たちと共にノンを叫ぶのか？」

われわれは、この問いかけに自らの思想と生き方のいっさいをもって、ひとりでこたえるほかない。しかしわれわれが内的了解ではなく行動をもってこれにこたえるべきであるとすれば――むろんそうするほかはない――それはさしせまった選択としてあらわれた自身の矛盾に運動形態を与えなければならない。

われわれは、二・七集会を支持する。われわれは、われわれなりの問題意識からこれに参加するとともに、二・七が全早大生にとって意味をもつ、新しい水準で提起されたあっまりであることを訴える。

われわれには十分な準備も遠い展望もあるわけではない。しかしわれわれは東大、日大の先進的学友が身をもって提起したことの思想的、歴史的意義を確認し合い、決意と希望を語りあうなかで行動をはじめることができる。当局と諸自治会の二重体制のもと、早稲田に潜在しているさまざまな矛盾に、弱々しいではあろうが最初の形態を与えることができる。

多かれ少なかれ諸セクトをおおっている政治主義、組織主義はやはり日本近代のゆがみの不断的なあらわれであって、われわれの排除すべき真摯な自己否定の運動とは無縁である。自分たちも奴隷であることを忘れまた隠して、われわれを啓蒙しようとする「賢人」たちに注意しようではないか。「トリデの狂人」に呼応するわれわれは「馬鹿」になるよりほかない。

われわれには大きな組織もないし完成した理論もない。いや、そんなものは必ず次の世代の叛逆の対象にしかなりえない。われわれは憎悪と自己嫌悪を風化させぬうちに、カンパや動や討論や、できることから行動しはじめよう。その行動があたらしい時代にコミットできたその分だけ、そこには未来の原理がはらまれているにちがいない。

内部にうずまく叛逆のほのおを、このふやけた管理消費社会への憎悪を自らゴトバへ、武器へ、組織しようではないか。二・七集会で早稲田のこのみじめな「平和」を破壊しつくしていくための、ささやかな一歩を踏み出そうではないか！

大学革命ははじまったばかりなのだ。東大斗争はあわらない。日大斗争はおわらない。早稲田がまだこんなにも平穏無事であるから！

一九六九年 二月 五日

Ⅱ 幻の唐獅子牡丹登場

遊行者 NO 1 〈背中で泣いてるア本篇〉

六九・三・二七

創造という幻想を断て
すべての紐帯を断ち 孤立せよ
感情を捨てよ

1

未来などない。遊行者にとって、今、現在という瞬間しか存在しない。今、現在という瞬間に自己の全的生を賭けることにのみ意味がある。

2

ここで四年間スギチョビレ
卒業式でハッパフミフミ

という行為が敗北した。何とぼぎこうが二五日の〈反戦連合〉という名のもとに行なわれた儀式破壊行為は、東大、日大闘争の斗争次元を乗り越えられていない。だから敗北したのだ。それは、うぬの感性にうぬの肉体が付随しえなかった結果である。うぬの肉体があまりにもネ粋だったのだ。

3

物理的空間、例えば学舎を占拠するなどという次元の行為においては、そこに物理的肉体を対置する以外にないが卒業式という儀式に対して「ハッパフミフミ」という儀式をもってして対置しようとしたのであるから、それはイマージュの斗争であり、仮にあの物理空間を占拠してたにしても、それは何ら意味を持たない空虚の勝利でしかない。二五日の敗北とは、「卒業式にハッパフミフミ」というテーゼを提出しておきながら、実際には、爆竹、卵、消火器を通しての行為しか現出させ得なかったイマージュの貧困さが、儀式を儀式に変現出来なかったということである。それは黒ヘルにカバ棒という形では決して対置しえないものであったのだ。

4

しかし、最終的手段としての肉体的武装――それがなぜ右翼に破れたか？ それはあの瞬間に高揚感情があったからである。実存的感情に押されて撤収を投げなかったからである。その物理的壁を突破しなければ、斗争山に愛のキッスもあげられないという必要性が高揚感情に敗れたのである。

5

情報屋が「反代々木派」「過激

――卒業式粉砕斗争とその後――

3・25卒業式粉砕ステッカー

ココで四年間すぎちょびれ
卒業式にハッパフミフミ
インテリの条件 (1) 手にはジャカル 心にマガジン
(2) 黒ヘルメガネをかけること
(3) こんなくだらないステッカーを作らない
(4) 卒業式で泣く
混乱をもとめて孤立をおそれず、力をつくして倒れることを辞さないが、混乱を起さずして卒業することを拒否する
――全学四年生連絡協議会・理工四連協――

無覚派」などと名づけたが、二五日の斗争はその肩書きを否定しうるものではなかった。否定しうる為には、徹底して「孤立を求めて連帯を恐れず」という斗争を展開せねばならない。

6

次才に現出化しつつある早稲田斗争は俺にとって外在的なものでしかない。俺はこの「場」を「遊行」の場所として利用しようと思っているだけである。相対的に、他のヒトが一人の参加者としての俺を利用する事が可能である。多くのヒトにとっては恐らく斗争の「場」であり、俺にとって「遊行」の「場」であるこの斗争において俺と他者との関係は、先に記した地平にある。だから他所にもっと俺が「遊行」出来る「場」があったとしたら、俺はあっさりとこの斗争を見棄てるということを最初に宣言しておく。

7

遊行者は常にどこへでも流れ行ける状態にあらねばならない。

8

遊行者は一切の責任を負わない。なぜなら遊行者にとって意味があるのは、その瞬間を生きるか死ぬか、唯それのみである。そして俺は二五日という時間を死んでしまった。残念でもなければ無念でもない。遊行者の意志にあるのは次なる瞬間のことだけである。だから、今俺がこんな事を書いている事自体、本質的に矛盾したことなのである。ただし、書くという行為そのものは、俺にとって面白い遊行なのである。

9

遊行者は政治的立場において政治的行為はとらない。同じく非政治的立場においても非政治的行動はとらない。遊行者はあらゆる場において、その場の意味、価値と関わりなく、ただ、その場に遊行するという関わり方をするのみである。

衆目の期待を一身に
幻の唐獅子牡丹！

早大全共斗

卒業式についに登場！
卒業式に出席して何んでもしてやろう！
《早学四年生連絡協議会》

Ⅲ四・一番外地集会

69・4・1早大集会に結集せよ

早稲田に叛逆のバリケードを！
学館実力解放を新たな早大斗争の突破口とせよ！

―早大反戦連合―

全都、全国の斗う労働者、学生、市民のみなさん。そして全早大の学友諸君。三月二五日卒業式粉砕斗争によって、長期にわたって静寂を保っていた早稲田に、叛逆の斗いが宣言されたことを伝えるとともに、学館実力解放を新たな早大斗争の突破口とせんとする四・一早稲田番外地集会への結集をよびかけたい。早大反戦連合は昨年十一月、数人の討論の中から出発した。しかし、われわれは大きな組織も完成した理論体系もなく、語るべき言葉すらなく、ただ自己の実存の自覚と、あらゆる権威に対する無数の疑問符とをもって出発したことを、あるいはどうしてしか出発できなかったことを明記したい。

全都、全国の斗う労働者、学生、市民の皆さん。そして、全早大の学友諸君。四・一集会に結集し、あらたな早大斗争を創造しようではないか。早大反戦連合はその先頭に立ち、徹底的な斗争をおしすめるであろう。

四・一早大大集会に結集しよう。

〈スローガン〉

☆ 諸個人および、クラス・サークルの独自的斗争要員会の連合による学館の実体的解放をかちとろう！

☆ 出教審粉砕！
☆ 全学生政治犯の即時釈放！
☆ 全国学園斗争勝利！

学館解放！

風のたより

学館実力解放
早大オ二学館を早大番外地へ

―そう反造反団（政・文・法）―

この風のたより君へ。オ二学生会館は現在のところ、ただ外的に存在するコンクリートの塊にすぎぬ。がこそオ二学生会館を様々のものとせねばならぬ。しかし、ただ単に学館＝サークル連合を子供に開し、ある物盗り主義に陥ることです。学館斗争を始めるにあたり必ずサークルそのものの存在意義が問われねばならない。サークルは現存的には学園における諸々の矛盾、疎外感を「解消」するものとして矛盾を隠蔽する形で、一定程度、存在理由を公認され、かつそれ故に学園における抑圧に加担していることは明白である。我々の内なる学館斗争はこの抑圧の論理を否定することである。「講義はつまらないし、クラスにおいても違和感をもちえない。それじゃ、サークル活動をやって、自分の好きなテーマを仲間と研究しようか！」というような逃避のメカニズムの否定である。日常性と非日常性の[illegible]こそ我々の学館斗争にある。大胆に学館のイメエジ

を変革しようではないか！ ここに「早大オ二学館を早大番外地へ」のスローガンの意義がある。ほんとうはこの小文を「安部公房」氏にたろって消しゴムでかきたかったのだが……

——私は具体的な暴力なら我慢できるが、理性の暴力には到底耐えられない。暴力的な合理主義を振うのは不正である。それは知性の足を狙って打つるうなものだ。

Oscar Wilde, The Picture of Dorian Gray

全国学園斗争を斗う学友に連帯し、早大斗争の新たなる進展を！

この風のたよりを読まれた君へ、隣りにいる彼へ彼女へ、この風のたよりを伝えてくれないか！ ではなぜ本当に消しゴムで書いてゆこう。我々ながら君たち見えないかもしれぬ。

早大番外地を全学化せよ！

教育学部叛逆者連合

＜偽りのマルクスと創造にかこまれて
人がベッドに入るとき
実践であるゲバ学は武器をきにとり
現サークルを、現大学を、こえてゆくのだ！＞

あの四・一学館斗争はワセダ共同体を自分のものとする番外地建設として斗かわれた。しかしながら、我々は決して番外地を「番外地」とするだけにはとどまらないであろう。我々はあの一年間にわたって斗われ続けている東大・日大斗争を頂点とする学園斗争が、このワセダが静かであるがゆえに終ることはないであろうという全面的な認識にもとづいて、我々の斗いをこの間かちとってきた。それは東大・日大を「番外地」としてとどめることを拒否するが故にある斗いであり、それなくして決して全国学園斗争に関れることはできないであろう。四・一学館斗争はあくまでも斗いの出発点であり、各党派の諸君がいうような「管理運営権を学校当局にトップ交渉してもらいさげる」といったものでは決してありえない。それは当局にとってかわって党派が我々を支配する以外の何ものでもない。我々は設備のよい学館をもらいさげたところで斗争をやめることを欲しない。それは単に学館の空間的移動で解決される問題でもない。それは現在のワークルのあり方、大学の存在そのものに向けられた全面的疑問であるだろう。

＜続・早大斗争へのアプローチ＞

「いわゆる学生さん解体」→
「現サークル解体」→
「自治会民主主義解体」→
（赤色自治会主義）
（中略）
→ 全学共闘斗争
→ ケルンの
→ バリケードへ
→ たいろ
→ さかりクード
→ ヒードに移行
→ ？

＜拒絶が静かな思想の着地であった。が、しかしそれは暗やみであった。でも暗やみに立ち戻り自己を発見したとき、彼はあらしの前に立つ。＞

（文責 J・T）

Ⅳ 四・一四二ヤロメ集会

4・14二ヤロメ集会への誘ない

―早大反戦連合・教育叛逆者連合―

ここは汚物でみたされた閉塞した下水道の中なのに、そこにはなぜか真昼のような奇妙な明るさがある。

そして、そこを分厚している〈わたし〉の肉体は、不完全燃焼している炎にじりじりと焦がされ、発生した毒は自家中毒寸前の状態で体内の最深部に沈澱されてゆく。

この奇妙に明るい倦怠にみちた情況の中で怒りはやせ細り、愛は対象を見失ってうつろにひびき、〈生〉は〈死〉とともに何の意味ももたず、異常な感覚だけが病的に鋭く研ぎすまされてゆく。

コルトレーンに聞き入る〈わたし〉は、〈あなた〉は、〈生〉でも〈死〉でもない空間にどっぷりとのめり込み、刹那的な時間の不連続点の中で自分を見失ってしまう。

しかし〈わたし〉は、そして〈あなた〉は、ふりおろされる警棒の下に、しめつけられしだいに遠のいていく意識の下に、〈非生〉としての〈死〉に対する恐怖と、その裏返しとしての〈生〉への執着をほんの一瞬かい間見た。そして〈生〉への飢えと渇きを、より高いところへ、到達しうる極限までと上昇させようと黙々と意識の斜面を這い進んで行く。

―流動する政治情況―

〈わたし〉は〈あなた〉との生きたコミュニケーションを求めて、そして真制の連帯の可能性への幻想をいまだに持ちつづけながら《討論集会》の中に自己を置く。

しかしのどもとまでこみあげてきた〈わたし〉のことばは〈あなた〉のことばと交錯点をもたないままむなしく消え去るかもしれない。

その時〈わたし〉と〈あなた〉は、意識下からことばを引きずり出し、出来うる限り再び蘇生させることを試みねばならない。

そして、それでも尽き残るであろう情感深く淀んでいる幾多の死と怒怨から発することばとなりきらない〈わたし〉の《呻き》が、〈あなた〉の存在とからみつくことができたなら、その時〈あなた〉の《呻き》と不可視の領域で出会い、共犯者の微みを交わらせることができるだろう。

鬱屈した情況からの脱出を
試行する〈あなた〉と〈わたし〉は
一つの陰謀に荷担する。
早稲田を破壊するという
楽しいたくらみに――

その全貌を暴く！
「反戦連合」の「方針」はこれだ！

― 十七日学館破壊→十八日、犬ビンによる国交破壊 ―

生研斗・文連（革マル系）

キョウ学友諸君！

われわれは、諸君の前に、怒りをもって、極めて破廉恥な、恐るべき事実を明らかにしなければならない。

昨日（十四日）夜、オニ学生会館六階は次のように使われていた。七時半から十時半まで「反戦連合」を名乗るフーテンらしきメンバー××名によって、次のような討論がなされた。

「十七日、革マル派は情況に対して決起闘争を行う。われわれは、そのスキに、学館を革マル派から奪いとり、これを『早稲田番外地』にしなければならない。18日、予定されている国交を粉砕し、一層早稲田を混乱させなくてはならない。革マル派による学館闘争の推進が着実に進みすぎる。」

そして十時すぎ、さらに×名のメンバーによって、そこでロウソクをともし、酒宴が開かれた。「現状に満足できない、自分の欲望を満足させたい、何かやってみたい」「体制に組みこまれたくない」「この社会の中でも何とか自由（なまける時間）が欲しい」等々とうそぶきつつ。

さて、学友諸君！「早稲田番外地」「解放区」と称されて、そこで行われていたことがこれだ。「反大学」「批判大学」とかいわれる内実は実はこれなのだ。結局は、自己のブル的な欲望を満足させたい、これのみで動いているにすぎない。確かに、彼らにとって「管理運営权」など問題ではない。彼等にとって、学生会館は学生自治活動の発展を売りとる場ではなくして、実に、酒をのみ、うさ晴らす場であるにすぎないのだ。

キョウ学友諸君！

学館の管理運営权をかくとくするわれわれのキハは、これまでかかる"反戦連合"による歪曲のりこえて推進され、着実に前進してきている。四日、学館の占拠をかちとり、それを基礎に、十二日、当局に対する国交要求集会をかちとり、そして十八日、当局との国交をかちとって来た。

かかるキハの地平にはばかる"反戦連合"のさきにみた「方針」を、われわれは、徹底に、実力をもって粉砕しなくてはならないであろう。

われわれは、諸君とともに、先頭に立ってこのキハを、そして、学館闘争を革命的に推進してゆくであろう！

新入生諸君、並びに全ての学友諸君！

自治会費という名目で強制的に徴集されている金が多額のものであることご存知でしょう。でもそれが何にどうやって使っているかご存知の方はほとんどいないでしょう。そりゃそうですよ。我々とは何の関係もない党派の間で争奪戦がおこなわれているからです。それも各派入り乱れていたころはまだよかった。だが、このごろでは米ソ共存ならぬ革民共存（革マルと日共＝民青）が成立し、早稲田に平和がもたらされ、それをとりもつ学校当局とそれはそれは仲がよいこと他の大学のシットを買うことはなはだしいものがあります。

先ず卒業式の席上で民ゴロ姐ちゃんが三十分演説する天皇行幸を学校からはずされ、女革マルは入学式に演説することで納得し、和平会談は成立しました。共に妨害する者は革民が責任もって阿行することで学校は安心しました。この和平会談は、一朝一夕に成立したものではありません。東大安田城の攻防戦をあっさりと見捨って逃げる等けずトンズラした女革マ

ル、歌って踊って楽しい民コロ姐ちゃんはせっせと働きたい、労力提供をはかり、政治屋グループに成長しまして、学校とわたりをつけるようになりました。生徒ちゃんケンカせず、ケンカはシャリ共にと長を抱やしてまいりました。

革民ともに女の魅力がありまして、お化粧に余念がありません。早稲田だんなからおこぼれを少しでも得ようと、それはそれはあかしいものがございまして、斯にはいまはやりのレスビアンムードであこぼれを得ています。入学式、卒業式にそれぞれが得たものがそれでございます。

その他にもたくさんもらいましたよ。女革マルは一文・二文・一商・社会科学の各自治会を総治し、一商においてがまで凍結されていた自治会費をもらい、社会科学部は本年度自治会費を往来支払い、来年度ならば早稲田だんなが強制的に徴収し、女革マルに渡す。そして文連・早稲田祭実行委員会をも女革マルに献上を与える。一方民コロ姐ちゃんは教育学部の地下の留学生寮委員長を頂き、日共親ガビアベックの法学部はもちろん民コロ姐ちゃんのものでさ。

さて驚くことなかれ、女革マルはうまくいくと、かれこれ五十万円近い金がフトコロに入るわけです。すでにトラック四台とゼロックスを買い込み、書記局大いにはり切ってますよ。あまけに最近大学より五百万円近い金がはり、ゲバ棒とヘルメット七大量に買い込みました。

ところが学部でもちょいとうるさいのが政経学部。政経学部を目指して着々と準備を進めております。日共＝民青がまだやり残すことがあり、小うるさいのです。日共＝民青の宣伝〝提口〟何某が糸を引き、日共系塚江何某が学部長ならびに学生担当理事になったはよいが、安藤と新島の両中共派がかさまわし、さらに反共派も小うるさく、政経学部は一波乱うみまっせ。

さて革民と当局との妖しいムードを嗅ぎとったシャリ共も黙っちゃいません。平和共存なんてふざけた事言ってられない。革マルだってそろそろガタが来ているんでしょう。そうかと言って民コロ姐ちゃんにまかすわけにはいきませんねえ。

全学の一般学生諸君よ。ただいたずらに来年は早稲田に大斗争が起きるとか、革マルと民コロが当局とボス交をしているとかただ漠然と議論していてはなりませんぜ。事態は刻々と流動的に変化していきまっせ。どうせ斗争を起こすのならもっときれいにやりましょうよ。ねえ！

（標題も署名もない怪文書であるが、情勢の流動化に大きな役割をえんずる。右翼反秩序派のものともいわれる）

V 本部封鎖から機動隊導入まで ―なぜこのおこりは明らかならず…

早大全学共斗会議（準）よりのアピール！

本部前に結集された全ての学友諸君!!

なかんずく新入生諸君!!

我々は四月一日学館を解放し、九日十七日本部を解放した。

四年間もの期間、学生不在の館としてあった学館は、六六年早大斗争の時にも問題とされながらも、未だ解放されなかった。しかし革マル派と学校当局とのボス交で「基本的に管理・運営権は渡す。しかしながら、人事権・予算権については学生と教授の運営による協議会を設けて、最終的な決定機関とする」という。この事が何を意味するのかといえば、我々自教育の帝国主義的改編＝産学共同路線の階々の強化の一環とみる。

そして、この場に参加しという事が叫ばれている。が、革マル、当局の交した内容によれば、〝自主規制路線〟に自ら（学生）が屈服していってしまうのである。民青系諸君の言う「大学共同体論」によっても、解決されない。我々は学館斗争のみに固定化するのではなく、早稲田の抱えている諸問題を、学生自らの手によって解決するその突破口とするつもりである。

瑞子山ー山岡ライン反対!!

中教審適用反対！

学館の管理運営権を全面的に学生の手に！

斗う学友は全て全共斗に結集せよ!!

秩序的沈黙か　噴出する自己表現か！　早大反戦連合

4・17本部封鎖をステップとし、我々に腐敗を強要する天上界の政治課程（当局＝革マル自治会のボス交に基く恐喝的大衆団交による学館斗争の形式的収拾＝内容的圧殺）を粉砕し、諸個人、クラス、サークル斗争委員会の根底的な斗争による第二学生会館の実質的解放を実現しよう！

4月17日、早大反戦連合と斗いを通じて真の連帯と統一を志向する早大の学生によって、早大本部の実力封鎖を克ち取った！

このことはいかなる意味を持っているのかを明らかにしたい。今、この斗いを真に発展させ、内実を与えて行くべく、全ての学友に対して、この斗いに対する参画を呼びかける。

本日18日に学校当局と一党派革マル派との間に予定されている「大衆団交」なるものは、学生の真の文化創造と厚生施設の範疇の中に押し込

め、又、社会総体、大学総体からの人間疎外を、その中（オニ学館）に隠蔽し、解消しようと画策する大学当局と、自治会主義（ポツダム自治会）の中にすむ学生のエネルギーを矮少化するあらゆる秩序派のグロテスクな仮面との単なる反乱表現者として、徹底的に最後まで闘いぬいたのである。

この、人間性の解体抵抗の構造が崩壊あるいは自己矛盾を克服し部分化された自己の存在を自己の全体性とむすびつけ自己権力の奪還者正にオニハの中に陥ろうとするならば、全部をわが手にしても全ての怪格となっていたセクト主義に対して、自己を否定する諸個人の連合体と仏然化し、それらに対して公然と民青・代々木の宣言者、十七日、本部封鎖として表現してきたのである。

早大に学ぶすべての学友に対して、永続的な斗いの結合をかちとられたことを告げ、そしてこのオニ斗に対するあらゆる斗う参画を要請し、真の人間性の復権をそこにかちとっていこうではないか。

▽数ヵ月にわたった第ニル派の醜悪な抑圧を打ち破り、斗う集団を全学においで創造しよう！

▽学館永続斗争解放！

▽本部封鎖貫徹！

教職員学生の皆さんへ

早稲田大学

昨日午後四時すぎ突如黒ヘルメットの学生数十名が本部を占拠しました。当時本部建物内には多数の職員が執務中でありましたので、安全な他の場所へ移したのち占拠した学生に速やかに退去するよう強く求めました。さらに堀江学生担当理事、山岡学生部長、市川同副部長ら四名は、本部建物内に入り、三度にわたり直接折衝を重ねましたが、直ちに退去させることはできませんでした。大学においては、午後八時臨時学部長会議をひらき事態の対処にあたりました。さらに午後十一時ごろ他大学生を含む多数者が、西大久保理工学部で会議中の村井理工学部長以下教職員が、学内の混乱を起さぬよう注意をしました。大学においては、いかなる理由があるにせよ、物理的な力の行使によって自己の意志の実現を他に強要することは許されません。あくまでも理性的な話し合いによって解決されるべきであります。

ことに大学の中枢的な機能をもつ本部を占拠することはその正常な運営に重大な支障をもたらすばかりか、大学の生命である研究と教育に大きな脅威を与えるものであります。

とくに学外者の介入は、大学の自治にたいする深刻な危険であります。早稲田大学の教職員学生は、秩序を平静のうちに打開するよう全力をあげようではありませんか。

昭和四四年四月十八日

大学当局の措置をできるだけ速やかにおしらせするよう努力します。

4.18

大学の自治を守り、学生内の暴力をすべての学生の力で一掃しよう！

一政学友会常任委員　佐川　悠二
一政　平民　学協

政経学部の至りの学友のみなさん。昨日の事態の経過を述べ、全ての学友が大学の自治を守り抜き、学生内の暴力を一掃する行動にたちあがることを訴えます。昨日四時すぎ、約七〇名の武装した反戦連合と反帝学評の学生が、約五〇名の革マルの武装部隊をけちらし、そのまま大学本部を占拠して封鎖しました。この暴挙にたいし、集まった数千の学生は抗議の声をあげるとともに、早稲田周辺に待機して寮内侵入をうかがう約千名の機動隊がいることを知りながら学生を行使にかりたてようとした日学同と革マルの挑発行動をも糾弾しました。反戦連合、反帝学評の「本部封鎖」の行動が、彼らのいう「革マルと大学当局のボス支配に反対する」という目的のみではなく、むしろ第二学館の暴力的占拠を革マルが行うか、反戦連合、反帝学評がおこなうかという対立とその仮派がある事を見抜かなければならないでしょう。更にトロツキストの言動を利用して警官の大学常駐化や大学管理法案の制定にたする、大学における民主主義の圧殺を狙う反動勢力の意図にそった行動であることにその最大の犯罪性があります。

一方、反戦連合、反帝学評の言動に怒りをもった学友を利用し、反共攻撃と学友を「お話し合い」であり、デッチ上げ「自治会」と「文連」の权威づけや三・一三理事会案を具体化した学館規約を理事会につきつける(?)今日の「大衆団交」と学生をカリタてるようとした革マル派には、昨日多くの学生が〝カエレ、カエレ〟と叫んだように、まったく抗議する資格がないことも明らかです。彼らの唯一の目的は第二学生会館を私物化し革マルの寝ぐらと非常活動の根拠地にしようとしていることにあり、その為にはまず我をならばず、一政学友会、文連の破壊を行い、抗議して自治会民主主義を守り抜こうとする学生には暴力をもってその言論を圧殺しようとしていることを見ぬく必要があるでしょう。

四月十六日、第一文学部でビラをまいていた〇さんを白昼、十数人でとりかこみ、「ビラの内容がデマであり、一文常任を攻撃している」という、まったく主观的な判断で殴打し、またそのことに抗議したいった無防備の学生達々絡会議の隊列に、ヘルメットを被り、牛乳ビンを片手にもって鉄材で殴りかかるといった暴挙を革マルは行ったのでした。しかもその後、立て看板を破壊した数十人の武装した革マルを糾弾した数千人の学生にゲバ棒でおそいかかることまでやってのけたのです。革マルと異なる意見を早大キャンパス内で宣伝してはならないのだろうか？　革マルに「デマだ」と判断されたならば、どんな学生でも殴られなければならないのだろうか？

ここで一政学生会議のビラを見てみよう。十六日、「日共＝民青が投石をもって襲いかかった」ゲバ棒を持って無防備のデモ隊列や抗議した学生にむそいかかったのは誰達なのか！看板破壊に怒った数千の学生は全て日共＝民青なのだろうか？「われわれは大学の当局管理をみとめるが……そもそもブルジョアジーの所有物をとることはプロレタリア革命の課題」学生会館の所有権を学生がうばうと「考えて」いるのは大学当局と革マルだけではないだろうか。東大駒場の学生会館ではプロレタリア革命が「実現」(?)されたのだろうか？

全ての学友のみなさん。政府・自民党は現在学生運動は暴力化し、反日共系と日共系が主導権争いをしている」と意識的に宣伝しつつ学生全体を共産主義嫌悪かつ切り離し、中教審答申にみられるように大学内における政治活動の禁止、学生自治会の解散という学生の民主主義的権利を一挙のうちに奪うばいそうとしています。この攻撃を打ち破ることは、学生、教職員と広汎な市民が団結して、政府自民党の教育破壊を追求し、「治安維持法の学生版」の狙いを暴露し打ってゆくことであり、学生内の暴力を根絶することにかけられています。政経学部においては、事実上相撲しこれる学生自治会を全ての学生の力に参加によって再建することが政府・文部省への最大の打撃であり、クラス・サークルで結集しよう！

今こそ学生内の暴力を根絶し、自治会再建の方向を全ての学生の手で作りあげるために四・二二クラス委員・学生集会に結結集しよう！

プライベート・レター

立水敏知（バの内から）

3/25 〃卒業式〃

卵が先か鶏が先か、戦術会議で教授風、
僕は知っている、秩序に対して、反秩序が絵画として育るのを
また絵画でさえ、その人が動けることも
真面目とは、資本主義体制のイデオロギーであることを
フランクリンは、そうだったのだ
従属のハずがヒラヒラ・ヒラヒラ[illegible]の目抑をかすめた

4/1 未明 ⇓ 〃学館〃

深夜のステッカーはりは旧左翼である。
夜明けのビラはり。新左翼。ピンク色
学館のガラスが、近づけなかった学館のガラスがメラメラ。
三年前の僕の夢、学館に赤旗が数十本。

4/18 集会

ロシア革命は、僕達に豚肉を記憶しか残さなかったが、
ポチェムキンの残像が僕等の集会のイメージと重なった。
行動することによってのみ、僕達は革共斗なのだ。
ここには〃内部〃か〃外部〃かとハった問題は、ただない。

本部封鎖から全学ストへ全学解放へ転化せしめよ！

本部封鎖貫徹！学館斗争勝利！
全てのクラス・サークル・諸斗争責任・諸個人の自己表現（＝要求）をもってストライキ決議をあげよ！

革共共斗委議

早稲田大学の全ての学友諸君！
先進的学友によってヨわれた本部封鎖は、今日21日で5日目に入り、我々のヨいは今や全く新しい段階を向えつつあるとハうことをまず初めに訴えたい。即ち、本部封鎖によって切り拓かれた情況は、今、我々に次な

るさり高次なヨハを突きつけている、ということである。

学校当局は、17日、大衆団交を中止するといっておきながら、全く破廉恥にも、翌18日にはゲロりとした顔で大衆団交(?)を行なってしまった。しかも、革マル派にとっては、こうした当局の、学生大衆を小馬鹿にしきった態度をそしり自らの利益として、全く形式的な集会を開いたのである。

学友諸君！ 我々は、我々を指導すると称していながら、実は、我々の運動を腐敗と汚辱の中に投げ込もうとする一部の醜悪な運動とはっきりと訣別しなければならない。そうした、我々の生き生きとした活動を圧殺せんとする〝大衆団交〟を実質的に粉砕しつつ、この間の我々のヨハはヨハれていた。

今、我々は、さらに広汎なヨハの独自的組織化を図りつつ、官僚ストライキではなく、真に我々学生大衆ひとりひとりが自らの主張を待ち、しかもその主張を行動に表していくことによって、全くすばらしい形での大衆ストライキ→全共ヨハの強固な確立→全学解放、といったダイナミックな運動をつくりあげていかなければならない。これこそが、次なる我々のヨハのステップである。

さら深化された、より広汎な討論をつくりだそう！ そして、それぞれの討論の段階(＝社会性)で要求項目をつくりだそう！ そして、その要求項目は、自らの内的必然性からうまれるものとして、決してどこかからかの借り物を使うな！

そうした内的必然性としての要求をもってストライキ決議をあげよう。そして、そのストライキ決議をいかなる革マル派の抑圧をもはねのけつつ、ビラ、立看板等でもってこの学友にアピールせよ！ そして、要求項目＝行動指標の一致するところをおそれに発見しつつ、行動委員会、ヨハ委員会の運営体を作り出そう！ ヨハの中で、討論の中で、さら深化された要求(異なった段階の社会性)を生み出せ！

学友諸君！ これまでの一切の学生ストライキは、自治会執行部からの〝提起された方針〟を討論して、それに〝納得〟したらストライキに入る、といったものであった。そして、ポツダム自治会の発想(市民主義的発想)のまさに典型として、スト権を取るための投票を行ない、その投票によってストライキを最終的に決定していくといったものであった。こうした見せかけの民主主義をフルに活用して、秩序的に事を処理しようとしてきまたしようとしているのが民青、革マルの運動である。そうした運動の結果としての犯罪性は、東大ヨハにおける民青を見ればはっきりとわかるであろう。

しかも、同時に告発されるのはまた、我々でもあり、そうした投票によって賛成にしろ、反対にしろストライキに何らか〝関わった〟という考えを、我々ははっきりと捨てなければならない。

我々は、誰かに何かを仮託することの幻想を、はっきりとうちくだかなければならない。それは幻想に幻想を上乗せするだけだ。自己はかけがえのない自己であり、だれかにまかせられるものではないのだ。我々は、「現在の我々にとって、これが自己の一切だ」と考えられる要求を示していかねばならない。そこにあらわれた内的必然性は、必ず自己の行動を保証するものとして[5]なければならぬ。それは、自らの思想にかかわることである。

(20頁下段へ)

背後から廻り込む攻撃を準備せよ！

反戦運営委員宣部

屋での斗う学友あるいは「斗っている」と思い込んでいる学友に提起する。

我々はバリケードの内で　漬物石と木太刀に変貌した。これは一定の事実である。

ある地点に滞まり、そこを守るという過程が　一見次の〈進軍〉へのステップを用意している様に見えてその実、決定的な腐敗への階段でもある事は既に気付かれても良い筈である。四・一七の若干のGEWALTを除けば、我々の斗争はもっぱら身体のごく一部（即ち口唇部）を使う極めて常套的なカンパニア以上のものではなかっただろう（これは確かな事だ）例えば我々の同志ビラは絶叫する。

〝秩序的沈黙が　噴出する自己表現か！〟（四・一八）

しかし、このビラは　我々にとってある気恥かしさを含むはずだ。政治的な実力斗争に向けて、ヤル・ヤラナイという明快な二者択一を提起し、ヤルという方に賭けてきた我々が　所謂「ヤッタレ」という過去形に入りこんだ瞬間、必ずナニモヤルコトガナイ！という空洞に向いあっているという構図を我々は確認できるからだ。この空洞は　我々の恥として常に覚えられねばならない。我々は、この空洞に無自覚なまま聞き慣れた政治理論を流しこむ事もできるし、学友に向って「カッコ良く」「叛逆」を訴えることもできる。しかしそれこそが甘い誘惑の罠であり、我々が峻別した政治ゴロの徒党へと堕ちて行く「自然な」一歩なのである。

実八占拠以来、数日間、我々は木太刀の杯に同じ言葉で問題を（一般的に）提起し（つまり叛逆のススメ）漬物石の杯にバリケードの中に鎮坐した。守るとは何と退屈な仕事であろう。雑用ばかりで、考える暇さえない。運動を作り出す主体として参加したのに、いつの間にか、運動に奉仕している。みんな昔懐しいカッドーカみたいになってグラ討なんぞへ出かけて行く。組織化、運動の展開……それが勝つために必要なのだ、という政治の論理が一つ一つ優先して行く。しかし我々は「それが斗争だ」なんて誰にも言わせてはならない。我々は、運動全体のイメージに参画こそすれその成果に縛られる事はありえないのだ。戦斗への投企も、勝負の決着も、その決断は各個の実存の次元まで持ち上げられねばならない。何故ならば、真の斗いとはガバ棒を持って非日常へ突込むヤル・ヤラナイの選択の水準を超えて、我々の日常性総体に対する生々しい拒否のビジョンを個的に追求する過程をもつ筈であり、政治過程への短絡を防ぐ自立への道もそこにしかないからだ。

〈早稲田の運動のハゲモニーを握った〉だの〈運動のリズムに乗った〉等言う御仁がいる。しかし、我々の情況は、リズムのツーステップに乗れる程軽くはないだろう。空間的に封鎖占拠を孤立して解決する問題など一つもないのだ。我々は、今こそあらゆる自己偏満を排した総括と確認を行わねばならないのだ。そして、マンネリの正面攻撃ではなく、敵の背後へ廻り込む、非公然の回路を発見するのだ！（文責　鉄）

VI 四・二八再占拠

機動隊導入、休校ーロックアウトによる斗いの圧殺を許さず 本部封鎖を貫徹せよ！

早大全学共斗会議

4月26日未明、一五〇〇名の機動隊が早大構内に乱入した。その力を背景に「一切の学生の立入りを禁止する……早稲田大学」と幾枚もの立札がたてられた。そして学生に対するバリケードが築かれ、ロープがはられた。にもかかわらず、数千名の学生がロープをはずし、迷バリをおしたおして本部構内に入りこみ、学校当局に抗議した。すなわちそのその外観においては、66年才一次早大斗争の2月19日機動隊導入に似ていた。だが、その同じような光景の中に、僕らは斗いの質の違いを厳然とみることができるだろう。機動隊導入に対する抗議の集会の発言でも示されているように、神聖不可侵の自治をもつ大学に暴力が乱入したという幻想的大学自治に依拠した怒りではなく、4・28斗争と関連しつつ我々の斗いを圧殺する為の導入ということ、その弾圧の構造をはっきりとらえたところでの我々の斗いの貫徹を宣言するものであった。

そして4月28日、我々は機動隊の力を背景に大学当局によってバリケードがとりはずされた本部を再度占拠し、バリケードで封鎖した。この本部再封鎖は、この中で新たな質を生みだした。即ち、十七日の本部封鎖が、十八日の革マルと当局とのなれあい団交粉砕を主要課題としつつ、それが

―立入禁止を禁止する 早大全共斗

（本部まえの木たつられた看板）

行なわれた18日以降において、単なる個別課題の改良的要求ではなくて、それを多くはらみだし、学生を支配し、抑圧せんとする教育に対する拒否として斗いぬかれてきたことが、26日の機動隊の導入によって更に強い意味を生ませしめた。すなわち、休校ーロックアウトということが、機動隊導入のほとぼりをさます、および学生の要求を否定することによって斗いの波及を防ぐことを意味するとともに、実は大学当局の思うがままに学生の活動を自由にできるということを示している。すなわち、この自由にできるということが「大学立法」案にみられる内容となったく同じものである。ことをみておくとともに、近代化＝合理化されてゆく大学運営が、例えばそれが民主化という言葉で表現されようとも、実はその根底においては従来な学生管理、学生の支配と抑圧がガッチリと存在しており、近代化の名によって外観とはうら腹にのがれられないものとしてますます強化されてゆくということである。26日の機動隊導入はまさにそのことを如実に示したものであり、我々はそうした大学当局の近代化路線による支配機構強化物砕の斗いとして、現在における表現、休校ーロックアウトを物砕して、本部封鎖斗争をより強固に貫徹しなければならない。

既に本部封鎖の斗いをうけて、各クラス、サークル、学部において斗争委員会、行動委員会が続々結成されている。それは一文の「殺人的語学教育粉砕」、法の「法学カリキュラムの帝国主義化粉砕」といったスローガンに示されるように、自らが直接うけているものに対しての斗いとして、

自己が斗いを組織するものとして進められている。本部封鎖を要とし、一切の弾圧策動を粉砕して斗いぬこう。

- 時子山、小岡は自己批判して辞任しなさい！
- 再度の暴動隊導入粉砕！
- 本部封鎖貫徹！　学館解放！　八号館解放！
- 教育の根源的矛盾に対決し、早稲田四万学生の総叛乱を！

学園ゲリラ　ナンセンス・ドジカル　八方破れ反斗宣言

―早大全共斗革命的再開粉砕に向けて―

A　ノンセクトラジカルからナンセンスドジカルへの転身好なり。

B　八方破れの斗いを貫徹すること。

C　無秩序・無思想・無セッソウの三ム主義をかかげて、意識的に混乱を求める斗いを開始せよ。

D　学園ポリティシャン（活動家）廃業宣言をとなえ学園ゲリラとして活躍せよ。

E　同志に対して、敵対的関係を有しつつスクラムを組むべし。（孤立せよ、ただ孤立せよ！）

F　総括は簡単にすませ、ただ行動オンリーで次々と撃ち、オノレ一人でも貫徹せよ。（論理でしゃべるな。感情でしゃべろ）

〔以下略〕

〔17頁からつづく〕

一切の情念をその要求の中に埋さこめ！　そして斗いの中でそれを深化し、自己と運動を不断に変革していこう！　そして、そうしたクラス・サークル、諸個人斗争委員会、諸団体の連合体としての全共斗を拡大し、発展せしめよ！　そのさまざまな要求をもって4/24大集会の中で、全ての人々の大対抗感を作りだそう！

全く新しい広場の直接民主主義をつくりだし、豊かなイメージの学園＝早大斗争を全学生の参加でかちとっていこうではないか。

錯乱のバリケード　早大斗争の記録
編集・発行　早大全学共斗会議
一九六九年五月一日　第一版
実費十カンパ　¥100